

審査の結果の要旨

氏名 細田 眞司

本研究は、C型慢性肝炎に対するインターフェロン（以下、IFN）治療に伴う副作用の中で、IFN 治療の中断に至る最も大きな理由となる精神症状について、多数例を対象とした臨床精神医学的研究である。

慢性肝炎に罹患したことへの喪失体験・性格傾向・IFN 治療前の心理状態と精神症状の発現の関連性、精神症状の早期発見のための方策、抗うつ薬などの向精神薬の効果と安全性、IFN 治療の中止の判断基準、IFN 治療による精神症状の予後について、調査研究し、下記の結果が得られている。

(1) IFN 治療導入患者は、慢性肝炎を診断された後、悲嘆反応を通して再適応していることを明らかにしている。さらに、診断告知時に不安を強くもった体験があるものに IFN による精神症状発現が有意に多いことが明らかになり、精神症状発現の危険因子である可能性を見いだした。

(2) IFN 投与に伴う精神的変調を早期発見するために、内科スタッフがツングうつ自己評価尺度などの心理テストを使用し精神症状の発現に注意をむけると、精神科医による前方視的研究と同程度の精神症状 detect 率を示し、IFN 治療による精神症状の早期発見の方策として、自己記入式うつ評価尺度の利用を提言している。

(3) 本研究は母集団 943 例の IFN 治療者を対象としており、IFN 治療に伴う精神症状を多くの症例から総括的に検討されている。精神症状の特徴として、IFN 治療のどの時期でも発現し抑うつ気分、精神運動抑止とともに不安・イライラ感を示す群が多く、その他に、IFN による身体症状への反応としての不安を IFN

治療初期に呈する群、IFN 治療の比較的中期以降に気分障害を先行して幻覚妄想状態、躁状態、せん妄に至る群があることを明らかにしている。そして、IFN 治療による精神症状が 24 週以上持続するものが 30%程度あることを示し、予後に関する分析を行い、せん妄、幻覚妄想状態、躁状態を呈する群において、精神症状の寛解までの期間を長く要する傾向を認めている。予後に関する多数例からの検討はなかったため、貴重な報告である。

(4) IFN 治療に伴う精神症状の中で最も多いうつ状態の群に、セロトニン再吸収阻害の強い抗うつ薬 trazodone の効果をハミルトンうつ評価尺度を用い評価し、その有効性を明らかにしている。うつ状態は IFN 終了・中止だけでは改善しない場合が認められるので、積極的な抗うつ薬治療が必要であることを提言している。

(5) 自殺念慮が強い場合、自殺企図が認められた場合、躁状態、幻覚妄想状態、せん妄が認められた場合が IFN 治療の中止の要件となることを提言している。不安状態、うつ状態では精神科的な関与により IFN 治療が継続できる症例が比較的多いことも明らかにしている。

以上、本論文は IFN 治療に伴う精神症状の多数例を詳細に検討し、これまで不明であった臨床的特徴、治療及び予後の諸点を明らかにしており、学位の授与に値するものと考えられる。